

<祈りのために>

「イスラエルの家よ、陶器師の手に粘土があるように、あなたがたはわたしの手の内にある」。
(エレミヤ書18章5節B)

主はエレミヤに「国がその悪を離れるなら、…災いを下すことを思いかえし、…民または国を建てる。…もしわたしの目に悪と見えることを行い、わたしの声に聞き従わないなら、これに幸いを与えようとしたことを思いかえす(災いを下そう)」(エレミヤ18章8,11節)と宣告されます。この神の目に見える悪は、我が国に山積しております。

2016年12月28日、真珠湾を訪問した首相は米国の寛容さ、和解の力を讃え、日米「同盟」は「希望の同盟」と興奮気味で語りました。しかし米軍基地の重圧に苦しむ70年余の沖縄の現状を見ると「真珠湾の和解」は「希望の同盟」に程遠いものです。首相の興奮を打ち消すがごとくそこに同行した防衛大臣は、帰国してすぐ靖国神社を参拝したからです。

歴史問題の解決と和解には被害者の寛容さが必要であることは言を待ちません。それよりも何よりも、加害者の慎みと節度が不可欠です。ドイツのメルケル首相は、何度も戦争を繰り返してきた独仏の和解は、仏の寛容さがあったから実現したと語りました。仏の寛容さの裏には、徹底的な非ナチ化と歴史教育が、西ドイツの指導者等の歴代政権による心を打つ真摯な謝罪があったからこそ、仏の寛容が生まれたことを心に刻むべきです。2015年、来日したメルケル首相は「苦しみを欧州へ広げたのが私たちの国であったにもかかわらず、私たちに和解の手が差し伸べられたことを決して忘れない」と述べました。

一方、我が国は、ドイツのような徹底した悔い改めと謝罪がなされているでしょうか。釜山の少女像設置が日本の謝罪の偽善を証明しています。口で謝罪を唱えながら、行動は痛みを与えたA級戦犯が合祀されている靖国神社へと足を向ける。すばらしい謝罪の仕組みです。これで命が殺され、足を踏みつけられた人々との和解が出来るはずはありません。

靖国神社社務所発行の「私たちの靖国神社」は、次のように述べています。「日本の独立と日本を取り巻くアジアの平和を守るには、悲しいことですが外国との戦いも何度か起こったのです。明治時代には日清戦争・日露戦争、大正時代には第一次世界大戦、昭和になって満州事変・シナ事変が起きました。戦争は悲しい出来事ですが、日本の独立をしっかりと守り、平和な国として周りのアジアの国々と共に栄えていくためには、戦わなければならなかったのです」とあります。アジアの国々を食い物にしながら、「共に栄えていくために」と詭弁を弄する神社に、今なお指導者たちが我先に参拝する国を誰が信用するのでしょうか。

それゆえに主は仰せられます。「この町とそのすべての村々に、…災いを下す。彼らが強情で、わたしの言葉に聞き従おうとしないからである」(エレミヤ19:15B)。主は愛する者を訓練するために鞭打たれます(ヘブル11:6)。「神の御心に適う」愛する主イエスを、神の栄光に生きる修練のために神が悪魔と闘わせたように、神から召し受けている霊的指導をすべき教会こそが修練を受ける時が来ているのではないだろうか。

<祈り>

主よ、あなたの手の内にある私たちこそが、主の証人となって立ち上がらせてください。
島田善次(宜野湾告白伝道所牧師・九州中会ヤスクニ問題特別委員会委員長)

<ヤスクニ問題とわたし>

村上清武（鶴見教会）

「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。あなたには、わたしをおいてほかに神があつてはならない。あなたはいかなる像も造つてはならない。…あなたはそれらに向かつてひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない」（申命記 5:6～9）。

天皇に関わることを意識したのは中学時代に始まる。中学1年(1956年)の時、私は好きな軍歌集を見ながら片端からハーモニカで吹いていた。丁度「日の丸行進曲」にかかった時、「やめろ！」と学童疎開では良い思いをしなかった12歳上の長男からいきなり怒鳴られた。「お前は知っているのか！戦争で何人の人間が無駄に死んだと思う！大勢の兵隊が天皇万歳と言って死んだ。…、その時天皇は何をしていたと思うか…軍歌は大嫌いだ」。日本の軍歌は当然ながら天皇（天皇の国家）の賛美を含む。兄の怒りの原因は何処にあるのか。神として生きた天皇が明治憲法下、自分が神であることを容認して生き、人々はその名を口にするとき直立不動しなければならないほどであった。戦争では臣民を塗炭の苦しみを与え、信頼した神風も吹かずに負けてしまったバカらしさを、そして先の大戦で大勢死なしたにも関わらず、今ものうのと生きている昭和天皇の話しを兄はした。私はすぐに天皇の真実を知ろうと天皇の本を買い求めたことを覚えている。

私がどこまで分かったか定かでないが、それ以来、天皇を賛美する「君が代」を容易に唄わなくなったのは事実である。古代の一つの豪族（この地にある民族の一つ）がこの地で1200年前、祭司を兼ねた呪術を行い、軍事力をもって他の豪族を制圧し、神ならぬ人間が天皇を名のり、自らの部族を存続させるために、日本統治を正当化するために、太陽神とその子孫と地方の神々を束ねる神話を造り、現在まで国を巻き込み、家系を継続させ、自らの宗教（神道 偶像礼拝）を単一民族でもないこの国の伝統にし、日本に君臨する権威あるものとした。現在の天皇家の立場は人間の業による歴史の結果であり、ましてや神の与えた権威でもない。しかしながらマスメディアは皇族（天皇家）へ敬語を使い、あるいは象徴として儀式・遺族の追悼等の行事によって上席につかせて、天皇を国民に対して権威付かせ、いつの間にか国（権力）、国民こぞって身分の上位に置いて偶像化を図る。私は27歳で洗礼を受ける直前、キリスト教を良く知ろうとして、数か月、故竹内厚牧師のところに頻繁に通って諸々の質問をし、その中で求道者なら当然大きな躓きともなるキリスト教と戦争に関係して、「教会は靖国問題へ積極的に何故に関わるのですか」と尋ねた。先生は「先の戦争で、キリスト教会は戦争を止めることが出来なかった。戦争に加担して、その深い反省から靖国問題に取り組んでいる。…キリスト教会は2千年の歴史の中で多くの過ちを犯した。キリスト教会の歴史はその反省の歴史でもある。…今ある教会はその上にある。…そのためにも信仰告白しっかり持たねばならない」と答えられた。靖国神社は御国（天皇）のために死んだ人間を神とし祀る。しかし決して英霊らしく死んだわけではない。日本は侵略し、敵地で人間性を失い、平気で民間人を残虐に扱い殺戮した人たちが、あるいは戦うすべなく餓死した兵隊が、靖国神社に英霊として祭られる。しかも、死んで天皇の下にある祭神になる。戦争とは私たちの真の神の御心に反し、敵味方相互に神の似姿（人間の尊厳）を傷つけ、殺し合うことであり、参加した自分自身の尊厳をも無視し、時にはそのために死する人を美化し、また自分自身の死をも偶像化する行為となる。

私は洗礼を受けてキリスト者になった。父親から「兵士を御国（天皇）のために死んだ人を祭神としないキリスト教」に不満の言葉が出た。次兄と姉からは「皇室は外交や自然災害で天皇の言葉で慰めを得る人が大勢いる。慰問旅行であんたよりずうーと役に立っている」と言われ、友人からは「この日本の秩序維持のためには天皇が必要である」と責められた。

今、国事行為と皇室行為（私的行為）の公私の分別も定かでないもとで、天皇の宗教行事が堂々と行われている。古来、天皇は現在の天皇（明仁天皇）に至るまで天神地祀を祭る神道祭祀の首長であり、神道に固執する。日本国憲法において、政教分離（憲法 20 条）は生じたが、その家系を日本国及び日本国民統合の象徴として選び、その地位を与えることに矛盾を持つ。

近く皇位継承も、憲法 20 条」に反して、祭儀（即位の礼、大嘗祭）を行うであろう。その時、天皇をメディアは伝統ある慣習として写し出し、かかる神道と深く結びついた行為を権威あるものとしてこの国の民をいざなう。私たちもいつの間にか、福音の進展を阻害する天皇への崇敬となり、やがて偶像崇拜に陥れるこの国のシステムに呑み込まれることに注意しなければならない。

そのためにも教会の礼拝に、祈祷会において、御言葉を聴き、信仰告白をし、断固として主イエス・キリストのもとに立つよう、神に祈りたい。

<被爆都市広島からの報告>

井上 豊（靖国神社問題特別委員会委員長、広島長束教会牧師）

毎年 8 月 6 日、広島市内は驚くほどの熱気に包まれます。平和記念公園には夜が明ける前から人が集まり、早朝のキリスト教・仏教・神道合同の原爆死没者慰霊行事が終わるとすでに集会がいくつも始まっていました。以前、デモ行進に参加していたら、百貨店から女性従業員が大勢出てきてデモ隊に冷茶をサービスしてくれたことがありました。原爆投下を謝罪するアメリカ人に会ったこともあります。…夜になり、人々の鎮魂の思いを乗せて川を流れて下ってくる灯籠は、息をのむような美しさでした。

さて国連で 7 月に採択された核兵器禁止条約に日本が署名せず、話し合いにも参加しなかったことは世界を驚かせ、日本政府が本当に核廃絶で世界をリードする意図を持っているのかと、疑わせる結果になりました。「唯一の戦争被爆国」の役割が今問われていますが、これは広島市にも言えることです。

広島平和記念資料館には以前、がれきの街でひどいやけどをした腕を突き出して歩く 3 体の人形が展示されていました。被爆した小学生の詩に、「げんしばくだんがおちると ひるがよるになって 人はおばけになる」というのがありますが、まさにその情景を再現させるものでした。原爆投下直後の写真はごくわずかしかなくその意味でも貴重なものですが、同資料館の東館が 4 月にリニューアルオープンしたのに伴い撤去されました。その理由について広島市のホームページは、「凄惨な被爆の惨状を伝える資料については基本的にありのままに見ていただくべきという方針の下、この被爆再現人形を撤去することにした」と説明しています。実物資料重視という建て前の下、創作作品だとして排除されたのです。全国から展示継続を求める意見が表明され、署名運動も広がったのに、顧みられませんでした。

改修した東館には爆心地を再現したジオラマが置かれました。CG 画像で被爆前の市内の様子が投影されます。すると次の瞬間に、やはり CG 画像で原爆投下と同時に焦土と化した街並みが浮かびあがるようになっていきます。入館者は原爆を投下したエノラゲイと同じ上からの目線でのぞき込むことになり、被爆者の視点を感じることは出来ないと思われま

す。広島平和記念資料館はかつてはショッキングな展示が多かったのですが、次第に怖いものではなく、今では平常心で見られる展示に変わってきているように思います。（それでも大きな衝撃を受ける人はいるのですが）。だとすると、そこにはどういう意図が働いているのでしょうか。原爆のことは言っても原発には沈黙している、これも問題です。

原爆の惨状を伝えるのに公的機関が頼りにならないとすると、市民の側からの取り組みを

強めなければなりません。最近、広島基町高校の美術部員が描いた原爆の絵を見る機会があり、圧倒されました。これまで被爆者が描いた原爆の絵があつて、いうまでもなく貴重なものですが、美術の素人が描いたという限界がありました。高校生たちは被爆者に会って丹念に取材し、その証言をそのまま目に見える形でキャンパスに再現しようと心を砕き、それをなしたげたのです。彼らの絵が全国の人々の目に留まることを願っています。

私はさらに、これに加えて、撤去された被爆再現人形の別な場所での展示や、新たな人形の制作を呼びかけています。

世界には、目を背けたくなる気持ちに逆らってでも見なければならないことがあります。原爆の惨状はその一つで、そうしたことの中心にキリストの十字架が立っています。平和を希求する人々が知恵と力を合わせて、原爆投下をあたかもなかったかのようにしようとする動きを封じてしまおうではありませんか。

<ヤスクニ・ニュース>

学校現場で恐怖刷り込み 千鳥ヶ淵「8・15 平和祈禱会」で現役教員が証言

クリスチャン新聞 8月27日

戦後72年目の8月15日早朝、東京・千代田区の千鳥ヶ淵戦没者墓苑で「8・15 平和祈禱会」(同実行委員会主催)が開かれた。都内の公立小学校教員の藤田直彦氏(バプ連・恵泉バプテスト教会員)が、ルカによる福音書21章28節から「解放の時」と題して説教した。

最初に、彼の勤める小学校の出来事を話した。「4月28日、給食の時間突然チャイムが鳴り、校長が話し始めた。万が一弾道ミサイルが発射された場合、建物の中に入る、物陰に隠れる、窓に近づかないなどの注意を呼びかけた。同時に『弾道ミサイル落下の行動』『弾道ミサイル落下時の行動に関するQ&A』というプリントと保護者宛の文章が配布された」…と。

現在の社会状況から、北朝鮮が実際にミサイルで日本やアメリカを攻撃し、アメリカが北朝鮮を攻撃することはあり得ないと考える藤田氏は、「このような放送やプリントは、必要以上に子供達を不安にさせないか。韓国系朝鮮系の子供達へのいじめを引き起こさないか」と懸念を覚えたという。しかも「弾道ミサイル落下の行動」のプリントは、内閣官房ホームページに掲載されて、各自治体へ「周知するように」との通知があり、それが学校関係者まで降りてきたものだった。藤田氏は、これは「演出された危機」だとし、「このプリントでどれだけ多くの人たちに、『北朝鮮は危険な国』という意識を刷り込んだか。子どもを通して配布した区の問題は大きい」北朝鮮は悪い国という子に私はこう問う。『北朝鮮の人は全員悪い人なのか。花を植える人、子どもを遊園地に連れて行く父親、子どもを保育園に預けるお母さんもいるのではないか』と指摘した。

ルカ21章28節では、『諸国の民が…不安に陥る。身を起こして頭をあげなさい。解放の時が誓い』ことを知るからこそ、戦争のできる国づくりを進める政府の嘘を見破れる。その嘘を皆で確認し合いつつ、主に従って平和の道を歩んでいきたい」と結んだ。(中田 朗)

<沖縄から>

8月24日午前6時過ぎ、辺野古ゲート前で座っていた平良悦美(平良修牧師の妻、堀一善牧師のお姉様)さんと他の一人に車が突っ込んで、平良悦美さんが骨折(全治三か月)されました。もう一人の男性は軽いけが。琉球新報のニュースに「車が来たところにわざと足を出した。当たり屋」等の1日2千件を超えるヘイト的コメントが続いた。悦美さんは「憎しみに対して憎しみ返す連鎖を断ち切りたい」と強調され、「私は彼を憎んでいない」と語っておられます。覚えてお祈りください。

752号ヤスクニ通信2017年9月10日
発行 日本キリスト教会
靖国神社問題特別委員会
発行人 井上豊 編集 川越弘
発行 桑広国(大和教会)
〒242-0021 神奈川県大和市中
7-1-22 TEL&FAX 046-261-3957